

天童寺拝登の記

小葉田 淳

一

昭和五五年四月一四日から二週間ほど中国社会科学学院の招待によって日本学士院の代表数名が中国を訪問し、私もその一人として参加することができた。

北京を一九日に立ち南京を経て、二二日午前一一時ころ杭州に着いた。杭州では浙江省社会科学研究所のお世話になったが、私は同行の山本達郎博士とともに同研究所々長に対して寧波の見学を強く希望した。それは寧波は日中交渉史上に最も関係深い港市であったからである。そして翌二三日杭州駅発午前九時五〇分の急行列車に乗り、午後一時二〇分念願の寧波駅に降りたのである。一行は山本博士のほか北京より通訳として同行した人民画報社の李保平

天童寺拝登の記（小葉田）

氏、杭州から加わった浙江省社会科学研究所所員一名と私を入れて四名である。

当日は寧波市内を見学して、寧波駅にほど近い華僑飯店に宿泊した。

二

四月二四日午前八時一〇分、天童・育王の両寺拝登のため宿舎を出た。奇しくも同日は私の誕生日に当たる。一行は四名のほか、前日から市内を案内してくれた国際旅行寧波支社陳炳良氏が同行し、自動車二台に分乗した。車は奉化江に架した靈橋を渡って、汽車東站即ちバスの停留場前に出て、寧穿公路を東へ進んだ。この公路は鎮海県穿山へ通じ、育王寺前にもバスの停留場がある。

寧波から天童寺まで三四キロ、また育王寺まで二四キロの距離という。盛塾を過ぎ五郷の停留場付近にて公路に分れて東南に進むとやがて万松関にさしかかる。公路は東へ宝幢を経て三、四キロで育王寺に達するのである。

万松関と刻した碑石が路傍に建ち、路の両側には松の若木が植えられている。天童寺入山に三関ありといわれた。その一は万松関、その二は小白嶺上の鎮嶙塔と同所にある鉄蛇関、その三は天童寺前の外方工池の左方、西澗に架した清関である。鉄蛇関は「天童寺志」の山図には、鎮嶙塔の少し手前の右側にある。万松関には、もと牌坊あつて上に万松関と書かれていた。唐代に松十里が植えられ、宋の真宗の大中祥符年間（一〇〇八—一〇一六）に子凝がさらに松二十里を植えた。しかし明の初期には松はすでに無く、寺僧新に植えて永楽一三年（一四一五）ようやく拱把となる、つまり一握りほどに成育したと記される。松二十里といえは万松関より山門の辺りまで植えられたとみえる。しかも明の中期過ぎにはその松も伐採され、その後も植樹が繰り返えされ、現在の松もようやく拱把と成る状況である。

万松関より二キロ余、ゆるい坂道を登ると右方（南）の小白嶺上、恰も峠の上に八輪七層の塔が聳えている。鎮嶙塔

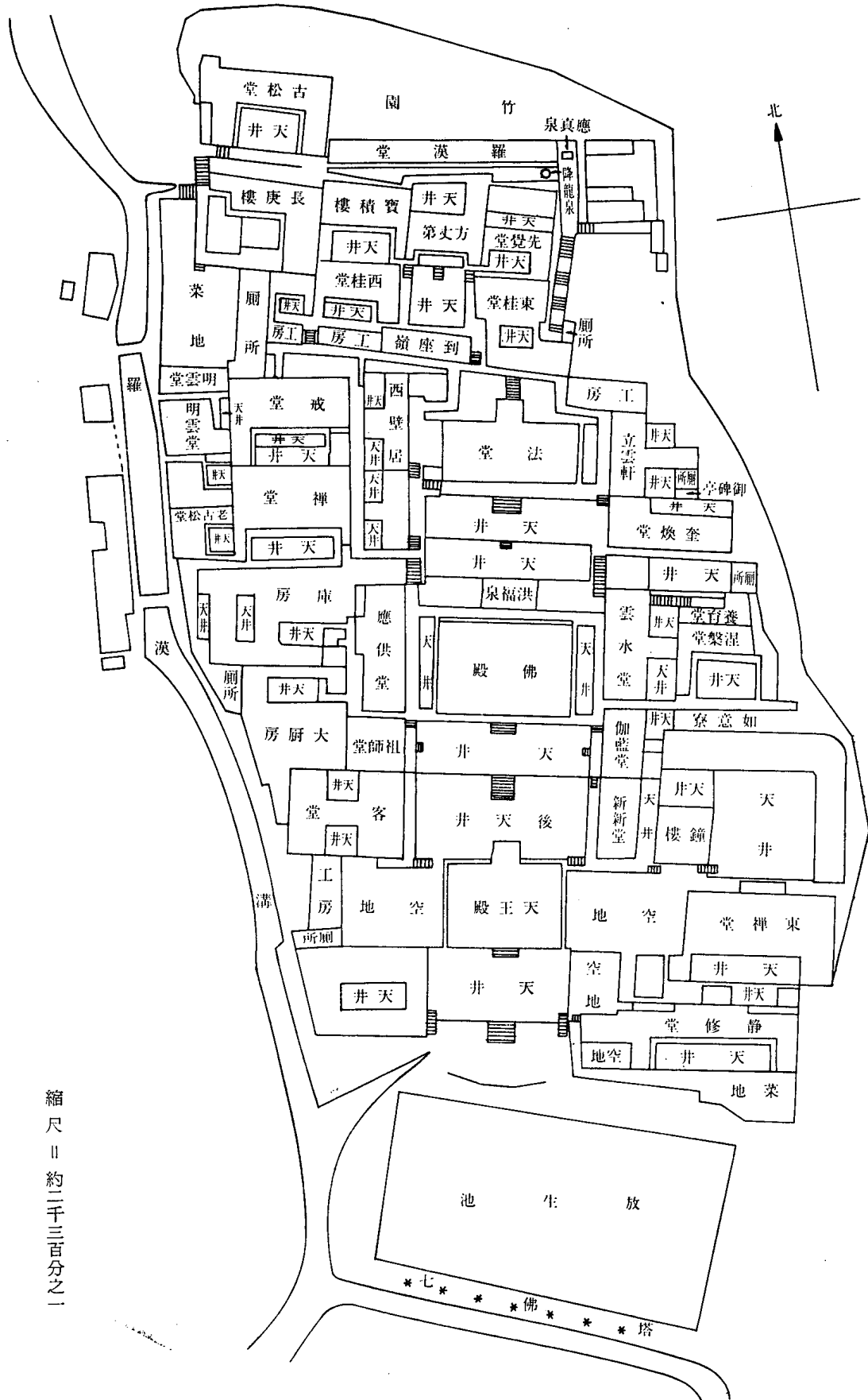
また七仏塔という。唐の会昌年間（八四一—八四六）天童住持心鏡藏奘が、小白嶺上に嶙あつて崇たたりをなすのでこれを説法開導し、やがて嶙死しこれを焚き燼余を埋めてその上に塔を建てたという。民国九年（一九二〇）天童住持文質が六輪七層の上部の二層が久しく傾毀していたのを重建した。常盤大定・関野貞両博士の「支那仏教史蹟」五には、大正七年（一九一八）九月の損傷いちじるしい同塔の照相と、修造成つた同一一年の照相を収載している。

小白嶺を下りると前面に近時築造されたと聞くダムがあり、これに沿うて天童街がある。ダムは、天童寺方面より流れきた天童溪の清水潭の場所である。天童街を過ぎ東北へ約三キロで山門をくぐり、万工池のほとりになる。もと内外の万工池があつたが、現在は内万工池のみ残り放生池ともいう。その南側に七仏塔がある。天童寺到着は九時であつた。

三

正面に天王殿、その後方に仏殿・法堂が建ち、法堂のほぼ後方に東桂堂、次に先覚堂、また右後方に（西北方）西桂堂・方丈第・宝積楼があり、最も奥に羅漢堂がある。伽

天童寺拝登の記（小葉田）



縮尺 1/2000 約二千三百分之一

藍はほぼ南面し、南より北に向ってしだいに高くなっているが、寺域はやや西北より東南に向って偏して、堂舎は実際は南南西に向いている。天王殿・仏殿・法堂を中心として、東西に、南よりしだいに高く北へ向う廻廊があり、その両側には多数の堂宇が並び建っている。

民国九年（一九二〇）蓮萍撰の「天童寺統志」にすこぶる詳密な天童寺の図を載せており、「民国己未（八年）夏末之吉、四明朱祥麟絵於天童寺之東桂堂」と記している。しかしそれ以後も重建重修された建造物もあろうし、民国二一年には天王殿周辺の堂宇は罹災したということである。本稿を草するに当たって京大人文科学研究所の付属東洋学文献センター所蔵の「鄞県通志地図」をみることを得たが、その中に天童寺の平面図がある。民国二四年八月製で縮尺一千五百分之一とある。この図はまたはなほだ精細なものであるが、天王殿等罹災後、重建重修が計画され、或はその工が進められつつある状況下に、製図されたものである。

これを「天童寺統志」の図と比較対照すると、堂宇の名称もかなり変化している。また名称だけでなく、その内容が移されたものもある。上段「天童寺統志」、下段「鄞県

通志地図

延寿堂	↓	静修堂	官客堂	↓	新新堂
大鑿堂	↓	方丈第	小方丈	↓	宝積楼
藏経閣	↓	戒堂	宝積楼	↓	庫房
齋堂	↓	応供堂			

また堂宇の増減も多少見られ、特に羅漢堂の西方に古松堂・長庚楼が新造されたことが著しい。その後も重建重修は続けられたであろうし、特に四人組時代には堂宇の荒廃はなほだしく仏像も破壊されたという。仏殿も一昨年（一九七九）九月によくやく修理成ったばかりで、私の詣でたときも仏像の造作や羅漢堂はじめ諸堂の修補が進められつつあった。

常盤・関野両博士の「支那仏教史蹟」や「支那文化史蹟図版」第四輯に収めた天童寺関係の照相は、常盤博士が大正一一年（民国一）同寺を訪ねたときのものであろうから、「天童寺統志」所収の図の堂宇とほぼ対応するものである。その照相を現在のものと比較すると、主要な建造物中では天王殿の火燈窓の形が違い、仏殿前方の廂の高棟の組方は現在のものは簡素であり、法堂二層前面の扉が硝子張りとなっているなど、細部の変相は顕著である。しかし

「天童寺統志」の図も民国二四年九月製の平面図も、建物の配置結構は、現在のそれと対比して大きな変化はないように思われた。

さて天童寺は明の神宗の万曆一五年（一五八二）七月大洪水に襲われて、寺山破壊しつくして礎礫一も存するなしと記されている。崇禎四年（一六三二）四月密雲圓悟が阿育王山から移り住し、同八年に仏殿・天王殿が建てられ、やがて法堂・先覚堂・藏閣・大方丈も成り、同九年に雲水堂が仏殿東側に、応供堂が同西側に、同一〇年に西禅堂・東西客室が、同一三年に東禅堂・鐘樓がそれぞれ造立された。かくて崇禎四年から一〇ヶ年間に、以上のほか東西兩廊・香積厨・浴室樓その他が建てられ、また内外方工池や内方工池南側の七仏塔も造られた。密雲圓悟が中興の祖といわれる所以でもある。

その後も罹災し、また傾毀破損する堂宇も多く、重建重修が行われた。「天童寺志」は釈徳介等の康熙末年の撰にかかるものであるが、同書や「天童寺統志」によると、康熙以来民国七年までに重建重修約二〇回に及んでいる。法堂についてみると、乾隆二一年（一七五六）に焼失し住持敏菴のとき（嘉慶一四一八、一八〇九―一三）重建し、宣統

二年（一九一〇）にも重修している。羅漢堂は内部の荒廢が現在もはなはだしいが、その側壁に填め込まれた碑に、民国七年永康徳閣謹記、信士会稽程鴨謹書の「天童寺重修羅漢寮記」とある。

「天童寺統志」の例言に

山寺図前志已備、因歴歳綿邈、滄桑疊更、或昔之遺構、今已湮没、或今之増葺、昔所未有、於是与旧図不相符、
茲編另繪図

とあるが、「天童寺志」の寺図は頗る簡略なものである。康熙以後に新に創建された建物もあるうが、崇禎年間に復興された主要な伽藍堂宇の配置結構は、だいたい「天童寺統志」の図のそのの原型をなすものと思われる。

羅漢堂側壁の碑文について述べたが、案内人の説明によると、万曆の洪水のため万曆以前の金石文は寺内には一も遺っていないという。先覚堂の側壁に、崇禎九年丙子季冬望日方丈密雲圓悟書の碑がある。乾隆の「鄞県志」卷二三金石の条に「先覚堂記崇禎九年季冬天童寺僧圓悟撰并書在天童寺」と記されるが、現在はひどく損傷している。「天童寺志」卷二建置の条に、崇禎八年密雲禪師始めて仏殿・天王殿を洪水以後に建て、すでにして法堂・先覚堂・藏閣・大

天童寺拜登の記（小葉田）

方丈も次を以て落成したと記し、先覚ということにつき論述し、次に先覚堂碑の文を載せている。これに「○前略此故山僧（密雲）發願、自開山來、凡開堂演法者、咸設牌位、同居此堂、遇朔望時、住持当炷香禮拜、啟後人、以了生死、○後略」とある。また同じく側壁に崇禎十年丁丑季春望「応菴和尚真蹟」を刻記している。応菴諱は曇華、「天童寺志」では一九代住持とし、南宋孝宗の隆興元年（一一六三）六月示寂したとある。なお、先覚堂の東に御碑亭があつて、順治、康熙、雍正の清の三皇帝の御筆の刻碑がある。

四

天童寺は西晉の恵帝の永康元年（三〇〇）義興が会稽郡鄞県東南山の東谷に茅菴を結び、やがて精舎を成したに始まるといふ。鄞県は秦のとき会稽郡に属しておかれ、のち五代のとき鄞県と改められた。唐の玄宗の開元二〇年（七三二）にいたり、法璿が義興の故蹟に精舎を重建したが、肅宗の至徳二年（七五七）に宗弼らが精舎を太白山峯下に建て、乾元二年（七五九）勅して天童璽瓏寺の号を賜った。義興の故蹟は現在の天童寺の東方約二キロの東谷にあり、古

天童とよばれている。

唐の宗懿の咸通一〇年（八六九）勅して天寿寺の寺号を賜り、宋の真宗の景德四年（一〇〇七）勅あつて天童山天寿寺を改めて天童山景德禪寺と称することとなる。南宋の高宗の紹興二年（一一三二）に宏智正覚が僧堂を始めて建てたと記されるが、この頃から両浙地方の禪院大いに興隆した。やがて寧宗（一一九五—一二二四）のとき五山十刹の制が創設され、明州慶元府鄞県太白天童山景德禪寺は五山第三に列せられた。

栄西が第二回の渡宋において、天台山万年寺の虚菴懐敏に参禅したのは光宗の淳熙一四年（文治三、一一八七）のこととて、同一六年虚菴が天童山に移るとこれに従い、紹興二年（建久二、一一九一）に禅旨嗣法を印証されてその年の七月商船に便乗し帰国した。虚菴は千仏閣を重建したが、栄西は巨木を贈って工を助け、不足の材は天童山境内の山樹を伐り、紹興四年成ったことは「天童寺志」等にも記載されて著聞している。

さて道元が慶元府に着いたのは貞応二年即ち寧宗の嘉定一六年（一二三三）四月のことで、七月天童山に入ったが、住持は大恵（大恵宗杲）派の無際了派であった。翌年無際

が亡くなり、道元天童山を出て諸山を廻遊していたが、宝慶元年（一二二五）五月に天童山住となった長翁如浄に見、そのとき長翁から釈尊正伝の大法を面授されたという。道元はこの人こそ長年もとめてきた正師であると深く景仰した。道元の師に当たる明全はともに入宋したが、天童山で亡くなり、道元は遺骨をいだいて帰国し、建仁寺に埋葬し墓碑は同寺に存する。道元が長翁より嗣書をも相承して帰国の途についたのは宝慶三年（安貞元、一二二七）秋のころであった。さて理宗の宝祐四年（一二五六）天童山は罹災したと記されるので、道元の起臥修行した建物はこのとき失われたものが多いかと思われる。東福寺所蔵の「大宋諸山図」二巻は、南宋末の禅刹の制度施設等を忠実に写生しており、一軸は重文の原本で、一軸は近世の写しであるが、重文の軸に天童山景德寺伽藍平面図がある。（金沢市大乘寺に徹通義介が将来したと伝える、「大宋諸山図」と同様の「五山十刹図」があり、これはやや後世の摸写といわれる）この図には、寺前に二池あり内万工池の南側に七仏塔、中心に南より勅賜景德之寺の勅額ある山門・三世如来を安置する仏殿・法堂と縦列し、最も北には方丈が建ち、東西に多くの堂宇があつて基本的には崇禎以後の伽藍

天童寺拝登の記（小葉田）

堂宇の配置と大きな差違はないようである。この図のもと
の作製は淳祐七年（一二四七）を降らぬという説もあるが、
（白石虎月「続禅宗編年史」五二四頁）なお、比較調査が期待
される。

明の太祖の洪武二五年（一三九二）浙江寧波府鄞県天童山
景德禅寺をもつて天童禅寺と号を改め、五山第二と定めら
れた。

宋元時代に大陸に渡った禅僧は、一二世紀後期以来は特
に多くは日本商船に便乗し、主として明州府（さらに慶元
府、元代に慶元路、明代初期に寧波府と改む）を発着地と
して、阿育王山や天童山に掛錫するものが多かった。
明代になると、遣明船の正使・副使をはじめ、居座こざとよば
れた役員、正使に随伴した従僧は、京都五山派の僧であつ
た。北京に赴いて一定の儀礼があり、寧波においても赴京
の前後に明の官憲と応接の行事もあり、北京より寧波へ戻
ると季節風を待つて帰国の途にいたのである。従つて杭
州や蘇州の寺院等にも短時間急ぎ詣でる状態で、寧波滞在中
も府城内の寺院のほか付近の名刹を忙しく歴訪したので
ある。これは宋元時代に往返した禅僧が、時にはかなり長
期にわたり諸山に滞留したりしたのは事情を異にした。

天童寺拝登の記（小葉田）

景泰四年（一四五四）四月下旬遣明正使東洋允澎等は寧波に着いたが、五月一四日阿育王山に赴いた。このときの從僧咲雲の「入唐記」に「去駅半日程」とある。駅とは四明駅であろう。阿育王山登拜後に、天童山にいたり一宿した。「其間二十里」とある。天童山につき同記に

天童山景德寺仏殿、大雄宝殿、祖堂有開山義興禪師牌、玲瓏窟大白峯之間、有密庵塔、門額中峰真前揭臨濟正伝、九峰、雙沼萬土（工）池、萬松関、宿鷲亭遺趾存耳とある。玲瓏窟は「天童寺志」に「巖之奇者曰璫瓏、峙寺西南」とある。また九峰とは九頭山のことか。密菴諱は咸傑、応菴曇華に相見、径山・靈隱（ともに五山）に住し、のち天童山に移り、「天童寺志」には同山二〇代とする。また同書によれば密菴塔は中峰にあって、密雲圓悟のとき重修し、また往時に塔院あって中峰菴と称したが久しく廢し、康熙年間に亥山暁哲のとき塔亭整階石を重修し菴を重建して密菴像を装供したという。「天童寺統志」の図に、中峰の麓に密菴祖塔・中峯菴が記される。宿鷲亭は遺趾のみがあるというが、小浜市常高寺蔵の「大唐五山諸堂図」の上巻の天童山景德寺伽藍平面図には天童寺門前に宿鷲亭が図示される。この図二巻は江戸牛込の濟松寺蔵のものを

近世中期頃写したものとわれ、東福寺蔵「大宋諸山図」、大乘寺蔵「五山十刹図」のものと、右の景德禪寺伽藍平面図などは同図にて、もと同一系統の原本より出たものを摸写し、或は前の二図を参照し、かつ他の典拠により加記したものであると考えられている。宿鷲亭は前の二図になく常高寺本にのみ図載がある。（「統禪宗編年史」五一―八頁参照）嘉靖一八年（一五三九）五月湖心碩鼎・策彦周良の一行は寧波に着いたが、八月寧波知府に短疏々草を呈して次のように述べた（「初渡集」）。

上国在々処々名区、吾日衆久稔其名者多矣、育王・天童乃奇宿碩納所坐道場也、茲聞彼二山幸接本府之地、今次、朝貢使臣太半承達磨氏之貽厥、是故要身遊禪刹、伏望專人嚮導、以俾遂素志、各引領侍之

しかし嘉靖二年に前回の遣明船の大内・細川船が寧波で争乱を起こしてから、遣明船一行に対する明の官憲の警戒が嚴重になったためか、この素志はついに果されなかったようである。

五

さて仏殿・法堂を拝して、東方の廻廊を昇り歩きなが

ら、私はふと私の故里にほど近い永平寺のことを想い浮べたのである。案内人が展望が効くからといって先覚堂の東方の台地へ導いてくれた。ここからは、前方つまり南々西に多数の堂宇が並び建ってほぼ中央に鐘樓が見え、右側に手前から法堂・仏殿・天王殿の大きな屋根が重なっていた。私は永平寺に通ずる霧囲気を覚えて感動した。このあたり第一の高峯海拔約七〇〇メートルの太白山を背に（北北東）、三方を諸山に囲繞されて、南々西から北々東へ、天王殿、仏殿、法堂とすだいに高く縦列してこれが伽藍堂宇の中心となっている。東澗は東谷より流出して西澗の水を合わせて天童溪となる。北山の諸水は天童寺の右即ち西方を流下して、外方工池を経て清閑橋外で東澗と落ち合う。これが西澗で、また羅漢溪ともよばれている。

七五〇余年の昔、道元がここで釈尊の正法をうけ、帰国後も本師長翁如浄を深く敬慕し、師が住し自らも修行した天童山を終生懷慕したことであろうと想われたのである。こうして天童寺と永平寺のつながりをいよいよ強く感じたのである。帰国後に常盤博士の「支那仏教史蹟踏査記」を読むと、博士は大正一一年一〇月同山を訪れたが、次のように記している。

天童寺拝登の記（小葉田）

丘を下りて天童街に入り、更に八支里にして巨樹道を挟む、寺域に入りて更に進むこと約三支里、幽勝の区人の心を爽かならしめる、時に脚下に溪流の響があり、九日月道を照して一歩々々清浄の空気を呼する。我が永平寺の勝景はこの天童の風を学べる事一見して明白である。我れ支那に遊ぶ三回、多くの省を跋涉するも未だ斯くまで我が禅院を彷彿せしめるものに接せぬ、ここに入りてその環境が恰も故郷に還るの思あらしめた。

もとより現在の天童寺、またここにいたる参道は、博士登拝時のままでなく、少なからず変容し、殊にかなり荒廢毀損の感は免れぬであろう。しかし私は博士と全く同じような感銘をうけた。

天童寺を辞したのは一〇時半であった。育王寺即ち阿育王山広利禅寺は大修理中で未解放ということであったが、格別の配慮によって寺内を一巡して午刻過に寧波へ戻った。今にして思えば、天童寺内をいま少しく時間をかけて拝覽し、また東谷古天童に赴き、天童街までは徒歩して、周辺沿道の塔像等をも訪索でき得ればよかった。しかし当日午後杭州へ戻るといふ詰った日程のため、それも叶わぬことは遺憾であった。

天童寺拝登の記（小葉田）

【附記】

昨年（昭和五五）一二月四日愛知学院文学部にて「寧波と天童寺」と題して講演した。その原稿に多少手を加えて龍谷大学千葉乗隆教授の還暦記念論集に寄せた。本稿はその後半部の文辞を僅かに訂補加減したものである。私は日中交渉史については、これまでいくらか研究してきたが、仏教史特に中国仏教史には全く門外漢である。それにしても天童寺につき、なお少しく調査する希望と企画を持っていたが、その余裕もないままに寄稿し、切に諒恕を願うしだいである。（昭和五六、一、二、三）